

甘肅論

タイトル	甘肅論
著者名	能海寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第4号
ページ	
発行年	1997.7.20
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時領国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

甘 肅 論

能 海 寛 著

緒 言

予は甘肅通なるにあらず。然れども日本人にして甘肅の地を踏みしもの幾人かある。予はただ中島某氏か10余年前、甘肅の東邊りを漫遊せりと云うを聞きしのみ。

予去る歳、丁度、北京變亂の頃に於て甘肅の地を徒歩すること3,600 清里、平涼府たり。蘭州府たり。西寧府たり。凡そ甘肅の大小30余城を実見して少しく、其の状況に通するを得たるのみ。今や甘肅の地に於て回匪の起るあり。端群王董福祥の扱れるありと。此時に当たりて、其地理、沿革、風俗を知らんと浴するの人多からんと信し、実地に見聞せる所を報し愚見を附記して、此論を草するなり。甘肅一斑たるに過ぎず。又錯雑未だ訂正を遂げず乞うこれを涼せよ。

第一 地理を論ず

(1) 省 界

甘肅の地は殆んど蠻夷を以て圍まる。見よ北は漠南蒙古に隣り、南は四川省松潘土司の番地たる岷山山脉を連り。西には青海蒙古あり。其西北は新疆戈壁の砂漠と境ひし、僅かに東方一帯か陝西省と相ひ接するのみ。

(2) 人 種

故に北方加蘭山遊牧の蒙古人は長城を越へ黄河を渉りて、甘肅に押し寄せ青海又は岷山地方の西番人、即ち西藏人種は西方又は南方より甘肄に入り込み。又西北よりは古の回鶻、今の回々教徒は新疆に本拠を定めて以来、砂漠を渉りて甘肄に移住するもの、今は数百万と成れり。然れば甘肄の北西南の三方は以上三種族の勢力侮る可からず。只東方陝西より侵略し来れる支那人種は甘肄の中部及び東部なる。渭河地域に於て最も勢力あるか如し。換言せば甘肄の地は漢、蒙、番、回、四人種が雜居競争の域なり。又少しく片避に行けば言語も漢番相い混雜し口音も異れり。其中、漢人に次て最も勢力あるは回教徒にして巴燕戒格(パーエーゲンコ)の如き循化の如き、河州(ホーチョー)の如き、其他、幾ヶ所となく全くの回城は所々に築かれ数千、或は数万の回徒が團結し部落を形作りて住し、支那人と雖とも其地方には無勢力たり。

(3) 面 積・人 口

其面積 12万5,450万里ありて、日本の四大島を除きたるの本島と匹敵する廣大なる一省なれとも人口は928万5,377人にして、日本に比せば本島の3分の1にも足らず。その幅員人口朝鮮と伯仲の間にあり。

(4) 山地及び其地味(山、土、旱、雨、林、草)

甘肄の内に山地と河邊との二大分類あり。

〔山〕=先ず其山地に就て云はんか、崑崙の山脉は全省に起伏し、月界にでも有るかと思はしむるの甲斐絹色を帯ぶるの禿山、降雨の度毎に崩れ流るる

の赤土黄泥山は至る所に聳へ、古の崑崙、赤嶺、或は、今の岷山、看秀山等盛夏白雪を頂くの高山又少からず。農業牧畜然るに、此甘肅の山地たる。慨して、之を云へは殆んど山頂に至るまで耕耘を施さざる少なく。大麦、小麦、烏麦、粟、菽、稗、玉蜀黍、豌豆等の農業及び羊、牛、馬、騾、驢等の牧畜盛んに行わるるを見る。水田なし併し乍ら決して豊饒の地なりとは称すへからず。

〔旱魃〕＝数10町に渉るの廣大なる田畠も天若し不下雨(プシャーユーイ)の時は筆の穂の如き隣れなる。作物は此処彼所に2～3本つつあるのみ。夫れを一本々々に薊り集めて漸く秋の収穫をある。是れ此の4～5年来旱魃に於ける山地農家の近状なり。

〔降雨〕＝而して一旦夕立急雨の襲ひ来るあらんか。干田は忽ち一大泥湖と成り濁流大道に漲り「甘肅のあらん限りにいかにせん黄河の水の清む時もし」とても謡うべく河南有一帯年々黄河の治水に幾百万兩の國庫の補助を仰くは、皆此甘肅の泥土か流れて河底を高かめ村落よりも却て河水の方遙に高きにあるか故に中国之憂とまで治水大臣を煩悶せしむる所以なり。

〔山林〕＝然らば山林牧草は如何と云ふに殆んど山林と称すへきものなく。蘭州の西北に於ては100清里中一本の樹木も見ざりしことさへあり。甘肅3,600清里の旅行中に於て只3ヶ所に於て天然の楨、山梨等の木戸繁茂せる林中を過ぎたることありしのみ。夫れも僅かに各々10清里斗りに過ぎず。

〔牧草〕＝牧草は一帯に生すといえとも山顛までも耕作せらるるの地なれば六盤山、石積山等の如き非常なる寒地にして耕作に適せざる地方を除くの外は牧場と称すへき程の原野なり。

〔苦水〕＝苦水此山地は水に乏しければ草木の発生を妨くること非常なり。特に蘭州の北方に至るは砂漠の風を帯び来りて沙山漠地多ければ水草に乏しく大に内地と趣を異にせり。又此山地の一大異点は甘肅省の名に反きて其水の苦きことなり。之を苦水と称し所謂塩の滴りたるにがり水と同じ。静寧、會寧、安定、平番、展伯等の数百里に渉るの山地の溝、井、皆苦水ならざるはなし故に田畠山野塩分の土塊は干柿が粉を吹きたるが如く、或は石灰を散きたるか如し。故に田畠山野塩分の土塊は干柿が粉を吹きたるか如く或は石灰を散きたるか如き故に苦水を以て塩を製する地方あり。飲料に適せず土坎に天水を溜め用ひ、或は遠方より車にて運び来る地方あり。以上は山地方に於ける状況なり。

(5) 水辺及び地味(産、河、沃地、水利、舟)

水邊は山地に反して灌溉水利の便あれば樹木森々と茂り水田少けれども、又全くなきにあらず。

- ① 産…… 麦粟類は勿論、阿片、烟草、綿、富豆(ソラマメ)、野菜、瓜類、杏、大桃、梨、柿、林檎、白葡萄等諸種の産物少からず之れを甘肅省目抜き最上の地とす。
- ② 河…… 先ず、其区域を挙げば、黄河及其支流たる清水河、祖勵河、莊浪河、大通河、湟河、大夏河、□河、並に下流に於ける大支流たる渭河及び其支流涇河一帯と、揚子江の一大支流たる嘉陵江の上流各地と、又出口なき涼州、甘州地方の河域なり。

- ③ 沃地 ……此水邊に沼へる一帯は蘭州を始め各府州縣皆豐饒の地なり。然れとも其区域甚た狭くして成都、又は西安地方の如き一望千里の地を見る能はず。河邊大概、幅10清里より20～30清里の所を最廣とし、長さに至りては50～60清里乃至百清里に達する地あり。然れとも断崖絶壁の地多くして河邊と云へとも前記の山地に属すへき不毛瘠地なる所甚多し。
- ④ 水利・舟…以上、許多の條流は何れも雪山、或は大山より源を發するものなれば水量多く澤々干田を濕すと雖とも何れも水深く幅廣く流れ急にして船筏を通するに不便、且つ、不毛の地を通過すること遠ければ灌漑の外には何の功用も為さず。一ヶ所とめ舟の通するの地を見ず只渡し舟、又は船橋の所々にあると循化と岷州の下流に於て、僅か数10清里間2～3の筏ありしを見しのみ。以上は水邊に於けるの概況なり。

(6) 物 産

物産、麻、棗子、富豆、豌豆、稗、甘肅胡麻、洋芋、牛、毛牛、馬、騾驢、豕、羊、酒、塩、羊毛、皮、角、毛織物、氈子、藥材、鹿射香、水烟、阿片、甘州米、大麦、小麦、烏麦、菽米、麦、粟、粟の如き糯米、玉蜀黍、楷州の綿果物、野菜等あり砂金、及鉄鍋等少しく産するの地あるも、他に有名の礦山あるを見聞せず哈密には銅を生し蘭州地方に来るもの多し、石炭の産する地又少し蘭州及碾伯に至る地方之を産す。而して、茶、竹、紙、砂糖の如き、之れを産せず。石又少し。

(薪木)の如き價ひ高かく、乾草最も多く灌木、石炭は之に次げり薪木は殆ど無しと云ふへし。馬糞、牛糞、羊糞を以て薪材となすの地方又甚多し。

(7) 交 通

交通、甘肅の一大名物は殆んど至る所馬車の通することなり。陝西より蘭州に至り、更に一は新疆に向ひ一は青海に至る。其他の片避皆車を通せむべし如此の山地にして如此く車の通するは一奇とすへし。其他出れば必ず馬、騾、驢に騎し徒歩する者少なく、又轎子少し。西安より蘭州に至る馬車18站16両、蘭州より涼州に至る5両、新疆省迪化府に至る90站80両なりと聞けり冬期には新疆、青海より駱駝の背に依て貿易を為すもの多し。又西安より蘭州に至る道路幅廣く兩傍柳樹を列へ殖へ絶ることなく炎天の旅者は陰を行き樹根に休み、或は眠むり其益する所無限なり。是れ左宗棠甘陝總督新に之を移植せしものなりと云ふ。木材に乏しければ橋梁至て少く徒歩のものは幾回か泥何を渡らせるへからず。又電線は蘭州に至り更に新疆の境肅州にまで達せり尔れとも蘭州以北は切断せる所ありて用をなさず。此地方電柱を得ること難きに由るなるべし。又傳驛、早馬の制ありて文書を送り又飛脚の信局あり。

(8) 三 大 府

三大府蘭州府は甘肅省の首城にして、黄河上流の四大支流は蘭州の上流に於て皆黄河に合し、水勢強大と成りて来る。而して長さ6～70清里幅2～30清里斗りなる。一大平地は瓢箪形をなし黄河其中央を流れ其兩大平地の中數兩山迫り来りて峽をなし南山の突出せる麓黄河の南岸に於て蘭州はあり。内外兩城より成り内城甚た狭く7～8丁四方に過ぎず。甘陝總督此に居る外城は内城を取囲みて10余丁四方なり四門を設け人口凡そ5万内外あり。市内甚賑ふ。黄河に

は船橋を架し新疆及青海に通す。蘭州の東北寧夏府には鎮守將軍駐屯して漠南蒙古を鎮め。蘭州の西北、西寧府には人口凡そ1万余あり。青海辦事大臣駐在して青海蒙古を撫し。以上蘭州、寧夏、西寧の三府を以て甘肅省の三大名府とす。

(9) 里 程

里程、蘭州は西安の西1,410清里にあり。北京に至る3,935里。或いは3~4,004清里、新疆迪化府に至る4,620里、伊犁に至る6,540里、青海冬科布に至る800里、四川成都に至る2,400里、あり而して、省城より省内各府に至る平涼へ770里、寧夏へ1,140里、鞏昌へ420里、慶陽へ1,080里、西寧へ620里、涼州へ560里、甘州へ1,040里、各州へ至るには安西へ2,120里、肅州へ1,460里、階州へ1,150里、泰州へ730里、涇州へ959里あり、甘肅の10清里は四川陝西に比て距離遠く凡そ我1里半に当たれり。

(10) 気 候

氣候、甘肅は甚た寒冷の地なり。我国北海道と大同小異ならんか、故に甘肅の多く米を生ぜざるは此為めなり。7月の中旬、六盤山を越ゆるに手の凍しけたるあり。蘭州に於ては7月の末に尚稲の苗が苗代にあり、未だ田植へをなしあらざるを見たり。四川にては4月頃花盛りなる阿片か、甘肅にては8月の末に之を眺めらる。麦、豆等の蒔り入れは、又8月の末なること。西寧の西に於て土曜の上に雹に逢ひ大に困りたることあり。夏尚坎爐に火を入れて夜寝るの地なり。以て其寒冷の土を推察するに足らん。

第二 風俗を論す

以上は地理を中心として色々の見聞を記したるが是れより少しく甘肅の風俗に就て記せば、

① 家 屋

材木の不自由なる地なれば土を以て煉瓦を造り之を天日に乾して積み上げ、屋根も2~3本の木を並へて上に小枝などを配置し泥土を以て平屋を塗り、室内又土坎を造り板少ければ多くは土間には甘肅製の氈子(ケット)を敷けり。陝西に比して穴居人少けれとも又所々に見る。

② 土 城

驛、鎮、等人家5~60以上もあれば必ず堡と称する土城を築き多く、二門又は一門を設け匪徒の却掠を妨くに備ふ。フトンなし又甘肅の宿屋は客か多く騎牲口なるか。馬車に乗るものなるを以て構内廣く、数10の牲口又車を置くに足る。

③ 衣 服

衣服は支那人、回々人共に内地と他の一般に異らずと雖とも寒冷の地なれば或は毛皮、毛織等を着するあり。

④ 番 人

番人は番城を築き漢回と雑居せず。或は回部番部交々部落ありて雑居せずと雖とも部落の雑交することあり。番人は人種、言語、宗教、衣服、風俗を異にし、近頃は支那風に化せられ番女にして纏足するものあるに至れりたるものも少からず。

⑤ 回 々

是又人種宗教、風俗を異にすると云へとも支那服を着、支那語を用ひ居れは一見異らざるか如きも其性質大に異れは、回々の家には必ず店頭茶瓶、茶碗の図を画きたるか又は教門と書せるかの長さ7～8寸巾5～6寸なる木札を下げて同族同教のものは知らざるものと雖とも互に相ひ助け相ひ親しみ旅行なす時にも茶碗、箸、鍋等を所持し、決して豕を食せざるの教規なれば支那人か豕を煮、豕を食せるの鍋、箸、碗をも用ひず頗る奇麗好きの風あり。又回々人は其眼付き体格一見して支那人種と異なるを見出さる。回々教のものは支那人の云ふ所に依れば盜賊を為すもの甚た多しと云ひ支那人も彼等を恐る。

⑥ 食 物

食物、甘肅には米を食するものは官吏など内地より赴任せる数人(モノ)に過ぎず。他は皆麵を常食とし之を飯と称し麵を食するを吃飯(ツーフアン)と云はずして喝飯(ホーフアン)と云ふ。実に奇なり。其他、鍋魁(コヲコイ)(所謂パンナリ)、炒麵(麦粉)、牛、羊、豕、牛乳、卵等其主なるものなり。酒は焼酒のみ。又阿片を吃するもの少からず。回々教徒は之を吃せず。

⑦ 商 業 外 国 品

商業及外国品商業には交通不便、水利不便なれば振はず。西安には天津上海よりの外国輸入品多く太洋物店あり。又新疆省には露国より輸入する外国品多しと云ふと雖とも甘肅は何れよりも最内地のこと特に水利の便もなければ輸入外品甚た少し嘗て露国人蘭州に商店を開き居りしと云ふも今は閉店せり。然れとも外国製釧、針、洋傘、寸燐、洋布、器機□等少からず。西寧及青海の辺に於て日本の寛永通宝錢の多きと日本製自転車商標の寸燐が輸入せらるるを見れば奇なり何れも西安、蘭州を経て入りたるものにして一ケの寸燐10文なり。

⑧ 通 貨 及 舛

甘肅全体に銀、銅の通するは他と同じ。只西寧地方に於ける毛錢、惡錢の多き100文中50文、60文の多きは実に一奇なり。支那には大錢(ターチェン)100文共に善き錢を云ふ。二八(アルパー)錢(20文の小錢と80文の大錢)、三七(サンチー)錢(小30、大70文)、四六(スールー)錢(小40文、大60文)、對半(トイパン)(小50、大50文)等の用ひ方ありて各縣各府一定せされは昨日通せるの地は大錢の外通せざるに今日は對半となるあり。従て銀を銅錢に換ゆるにも一兩に付蘭州では1,150文のもの西寧にては1,350文と変し、又地方に依りては1,000文なる一吊錢(イーチャヲチェンハ)は980文の地あり。少きは400文の地あり。故に一百と云へは80文にして一吊と云へは400文と成り混雜各状すへからず。又量舛は如何と云ふに支那一舛の米は通常三斤内外の重さあり日本の一舛と大同小異なるか甘肅に於ては一舛に九斤の地あり。蘭州の如きは十二斤にして日

本の四舛入りを以て蘭州は一舛とし、西寧の如きは三舛入りを以て同しく一舛と云へり。

⑨ 物 價

近年陝西、甘肅共に旱魃の為に殆んど飢饉に迫まり一斤の麵(ミェン)又は鍋魁各地大に差あり。西安64文、平涼75文、會寧85文、蘭州72文、平番40文、甘州18文、碾伯32文、西寧28文等各位に非常の差あるも運輸不便なれば之れを貿易して平均せしむること出来ざる有様なり。

第三 甘 肅 の 沿 革

古へより甘肅は蠻夷を以て有名なるの地なり。遠く夏の世の西戎、周の世の大戎あり、北方匈奴の憂ひあれば秦始皇をして甘肅、蘭州より長城を築かしめ下りて唐朝以前には、今の甘肅一省中にさへ西涼国安正、北涼国甘州、後涼国涼州、南涼国西寧、西秦国蘭州、北夏国寧夏の東と分立して王と称したることあり。其後代々吐番、回鶻、予は西寧の西に於て大なる古墳らしき丘陵を見たり蓋し前涼又は南涼王の墳墓ならん。

突厥蒙古等の西夷北狄は常に甘肅を冒し中国に冠せざるはなく、又古への西域36国龜茲国庫車、干□国和□、焉耆国、喀喇沙爾、跣勤国喀什喀□、高昌国吐魯番等より遙かに印度国の古代佛教国と支那国との交通は代々絶ゆることなくして常に其中間に在りて此甘肅は亜細亜文明の交換場たりしなり。故に甘肅は4000年来支那史上幾多の沿革を経來れるの地なり。孔明は屢兵を甘肅の地に出せしことあり。元の太祖成吉思汗寧夏地方を征し六盤山に於て崩せり。蘭州の如き漢に金城郡を置きし以来、唐に至りて蘭州と改め、益々發達し來りたるものなり。蘭州城の南山に五泉と称する結構美麗殿宇高壯にして而も其高樓す抛りて風景を眺め絶佳なること云ふへからず。蘭州城を目下に見、遙かには黄河の滔々と流るるを望む。嵩慶古刹には地藏堂、金剛殿、明代萬曆の石碑あり。大悲殿喇嘛字の咒を額し靈祐祠、嵩文閣、文昌宮、地藏寺等或は「恒河宝筏」と額し、或は真に迫るの名画極彩色は四川陝西に於ても未だ此如く美麗なる殿堂か見ざる所なり。大明嘉靖13年五泉千佛閣記なる碑文あり。蘭古金城郡也今僧清朗寂之禪林幽静遂修閣云しむ。又大明天順6年の碑及萬曆21年先登橋記

(即ち高樓の記)皋蘭山三台閣碑等あり。京都丸山也阿弥の風景に比して勝るとも少かることなし。又蘭州には、此外西門外4～5里の地なる古刹及び黄河の船場を渡りたる所、断岸絶壁上の金山寺は共に蘭州の三大名所として風景最も佳なり。此等は勿論寺なれとも一人の僧侶だに住せず俗人ありて之を守り参拝するもの。遊來するもの茶菓を出して優待せり。甘肅にても300年も前の建築物は見ず皆清朝時代に新修せるものののみなり。甘肅に於て古碑は明代以上のものを見当らず安會縣城外の如き多くの明碑を見たるも参考たるべきものあらず。清朝に至りては石碑、木碑多しと雖とも多くは道路修善等の記事なり循化か回匪の為に圍まれしときに寧夏督督來りて其圍を解けりとの碑を見たり(今其写しを紛失せり)

第四 宗 教

① 回 教

甘肅の名物たる回教徒は唐代より、此地に雜居し来り。又元の太祖に従て来れるもの多かりしかは之を各省に分ちて其勢力を分てりと云ふ。清朝の始めには涼州、蘭州、華昌を陥れしことあり回徒馬□心（回々姓多くは馬此之マホメットに出るか）新教を唱へ乾隆年代循化地方反寇すること絶へざりしと云ふ。又10余年前固源、平涼、涇州地方の回々一揆を起し長武等を潰れ長安に寇せりと云ふ。昨年予が回々の部落を通せんとするや支那人は、其危険を説きて頻りに、予に通行を中止すべしと勧告せしも、予は断然其地を過きたり。循化の上流黄河の渡しあるの地数百の回々は、一昨年反せるも直ちに平定せり。又昨年も反寇せんとの模様ありと聞けり。或夜回々人の内に泊す。一人の支那人の小賣商は、予に耳語して云へり回々の部落を巡るには自分も回々なりと云ひて彼等を欺さずんば何の商賣も出来ずと彼は主人などに向て頻りに同教なりと嘘言を云ひ居るを見たり。果そ回々か盜を為すか支那人か回々を欺すか何れも大同小異の悪人輩なるか如し。故に宿に泊すや回部地方にては先づ第一に大教か小教かを尋ぬ。大教は佛教道教にして小教は回教なり。故に小教なりと答ふれば彼等は非常に喜び歓待せり。回教は寺院の風一定し等しく真清寺と称し河州の如き最も大寺あり。哥蘭即金經を念し在家の教師やり。

② 仏 教

支那佛教は振はず支那僧侶極めて少しと雖とも、至る所に壮大美麗なる寺院あり。而して多く僧侶の住せる大寺なり。又寺院の建築物に於て 300年も維持せるものなり。修理なれば天地君□師位のこと。

③ 道 教

道教は佛教よりも勢力あり。
道士を多く見受く。

④ 喇 嘛 教

佛教中最も盛力あるは喇嘛教にして西寧の西にある黄教の開祖、第六世達賴の居れる寺院なる塔爾寺の如き、□州の□□寺の如き、何れも 3~4,000の喇嘛僧住し、又狹道、西寧、西番等の番人は皆喇嘛教徒なり。

⑤ 耶 蘓 教

耶蘓教天主教の宣教師、平涼、蘭州、岷州等に住し、各地を巡化すと雖とも信者は少し全省 5,000余人なりと云ふ

第五 省 治 の 模 様(府督、總督、城小、官大、統計)

甘肅省内八府五州及ひ53の州、縣、廳あり、嘗て伊犁事變の頃左宗□蘭州にありて甘陝總督たり。近頃には、今の兩廣總督陶模去りて□光煮来り今や前の雲貴總督□蕃又其後任として蘭州に赴きつつありと云ふ。甘肅に三□府あり。城小官大、門小窓大、臉好脚大と云ふ。是れ甘肅の各城の寂模たるを云ひ

又元来支那人は閭室を好むの風なるに甘肅の家には窓、障子の大きくして明かるきを評し又女纏足するも他省に比して足大なるを云ひしなり。実に其如く甘肅の府州縣より宿駅鎮の各城各駅実に寂漠たるものにして之を四川省などに比するときは甘肅の府縣は四川の田舎なる一鎮一駅にも及ばず。隆徳縣の如きは其最も甚しきものにて城内外僅に1~200戸あるのみ。3,000戸に達するの城は極めて少し。平均1~2,000戸のものならん。而かも縣城の間距離遠く100里乃外なるは少なく200里300里以上の距離なるあり。其間には宿駅ありと雖とも百戸を越ゆるの地は少く3戸5戸多ため4~50戸の如き最も多し。如何に甘肅の各地か寂漠たるかを想像するに足らん。予か実見推測する旅記にて見れば四川省成都府より省界七盤関に至る途上900清里(日本の110里)には成都を除き九ヶの大市凡そ34,000戸、17の中市5,250戸50余の小駅計700戸を通りたるに蘭州より省界□州瓦雲に至る950清里(日本の140里・甘肅里長し)の間に蘭州を除きて僅かに六大市凡そ7,800戸、□の中市、2,350戸、50ヶ所の小駅900戸を過きたり。以て照見すべし大市なりして只寂漠たるの小駅か連梯することを、両省の一斑を見るべし。四川は76ヶ所計39,950戸にて甘肅は71ヶ所11,050戸に過ぎず。里長に於て30日本里を増すにもかかわらず殆んど4分の1。19戸数なり。以て城小の実を知るべし。而め官に至ては四川の富地も甘地の貧地も總督たり。將軍たり。提督たり。知府たり。知縣たり。皆同等の官を置けり。故に城小官大の諺出づるなり。□治果して如何。董福祥は元と寧夏府の省南金積堡と稱する地方にありて旅人等の物品を却掠するを以て業となし居りし山賊なりしか時の將軍其武雄なるを見て彼れに甘肅提督の官を授け回匪を平けし功ありて、今の位置に上りしものなりと其実は官其暴勇を持て余し官を授けて懷柔策を講せるものなりと四川余蚩子の今官名を有するか如く由来支那政府の一大秘訣たるか如し。故に甘肅に於ける支那人は治者の位置にあり乍ら他種族又は豪族の為に苦しめられ弥逢の策を講じて其日を送り居るにはあらざるか。支那政府の弱点を見ては蜂起せんとするの兆候あるは回教の反狀常なきを見て明らかならん。予は一日番人の部落を通ずるの節此地は何縣管轄なるやを問へり。番人は不審の顔付きにて笑ひつつ我々は何縣の管下にもあらず。某土司の民なりと答へ殆んど支那政府の有無を解せず。土司酋長の類を以て王の如く思へり。又其殆んど然り政府の微力なる政令の行はれざる以て知るべし。

甘肅の兵備又嚴ならざるにあらず。寧夏に將軍あり。蘭州、涼州、甘州、諸府提督あり。西寧等に副將あり。各地に營所、守備堡配置あり。嚴ならざるにあらず。又蘭州には洋式の兵練あるを見たり。

予は其实力如何を知らずと雖とも甘肅の兵は瘦地に育ち難に堪ゆるのものなれば衆の服する將を為しなれば清国中有数の強兵たるを得んか。

(昨年の事變と甘肅)

昨年6月末丁度北京騒動(北清事變)の起り始めに陝西省西安府にありて西門外等數十營の旗を翻へしつゝ駐屯し大軍過境とあるを見て何の故なるやを知らず。甘肅省の平涼府に至りて始めて北京各国の外人攘斥せりとのことを聞き次て途上甘肅兵の北上に逢ひ。或は蘭州に於ける甘肅兵の洋操、旅人の宿調への嚴なるあり。或は外教信者9人を捕縛せるあり。更に西寧府に入れば今まで等困に放棄し有りし青海の取締一層嚴重となり。漢人、蒙古人、西藏人、回々人等しく路票と稱する青海大臣の証明証を有せざるものは青海に入ることを許さざることとなり。循化に於ては皇帝西安に逃れりと聞き河州に至れば8戸に

一人つつの兵丁を西安に送れるあり。更に狭道州に至れば新募の軍夫城内に充滿し四方より集り来るもの日々増加す。軍夫と云ふと云へとも皆戦争に出つるものなれば、頻りに青竜刀など持て稽古をなし、岷州の外人1ヶ月も以前に引揚げしと云ひ措州にては或地方は外人を止宿せしむへからずとの告達ありと云ひ。其頃より北京の騒動も下火となりしと見へ不准殺洋人の告示を見る支那人之れを見て驚くものあり。又外人を保護すとの文出て中外議和などに至り安心するに至れり。

第6 甘肅と新疆の關係及青海

(1) 甘肅・新疆の關係(移住・鐵道)

此二省は最も親密の關係あり。甘肅か太古より漢蠻の衝突地となり幾十年間幾多の沿革を有するに關はず尚太古と同様に漢蠻の焼点となり。西戎去れば犬戎出て匈奴起り、吐蕃交はり突厥、回鶻、蒙古、回々、西番何代として漢蠻の争ひ絶へたるはなし。今や又北魯の強力は新疆、伊犁に襲ひ来たり。蒙番回到て此地に衝突を見るは、或は露清の關係ならんか。甘肅も尚新開の地たるを免れず。湖南、湖北、河南、陝西の内地に喰ひ余れる支那人、或は内地にて犯罪して一時跡を盲まさんとするの悪漢は年々甘肅に移住し来り。安定の如き湖南人は殆んど其大半を占むと其地至る所に湖南人の勢力あり。彼等は犯罪只甘肅に止るもののみにあらず。新疆の地か却て甘肅より遙か数等の上位する豊饒にして生活に適せるを見聞しては新疆に入り込むもの少く許にあらず。僅に10余年間中にさへ戈壁地方旅店なり。舗子なき地に今は漢人の部落、所々に現在し来れりと支那政府は兎に角支那人種か回々、蒙古の中に、益々侵入するは自今此地方の有様なり。果して将来如何の結果となるや。此甘肅新疆をして将来最も有望ならしめとせは鐵道を布設するに若かず。予蘭州に徒歩し行く道中案すらく他日此地に遊ぶの日には、今日の難は見るへからず。必ず鐵路に拠ひのことあらんかと。

近頃露国は新疆より青海、甘肅を住て西安に達せんとする鐵道布設に意ありと西伯利亞鐵道さへも未だ成らざるの時儀に其希泡ありとも、此地に鐵道布設せんとするは頗る困難なるべし。尔れとも、予は考ふるに、此線は必ず他日計画あること信す。第一欧亚最近の線たること。第二に寒氣も西伯利亞鐵道の如く甚しからざること。第三地平且にて西安より渭河に沿ふて上り蘭州より莊浪河に沿ふて上り哈密伊犁に至れば殆んど山なく布設に便なること。第四将来亜細亜中原と各国勢力の焼点たること等なり。而して困難なるは石又は枕木の如き遠方より運はざるへからず。尔れとも青海又は天山南路には山林又少しとせず。或は鐵道を見るに至るの日あらんか。

(2) 青海の風俗と西洋及び西藏人種の範圍

甘肅の辺境及び青海、西藏等の風俗を見るに西洋と大に其趣を同ふするこそ奇なれ。建築は洋館の如く石、煉瓦にて疊み上げ支那人之を蠻家又は□房と云ふ又窓の恰好、烟筒の有る工合より米生せざれば、麵包(パン)を食し牛乳を呑み、牛肉、羊肉を食し、バター(支那人之を酥油と称す)を食し、□□、砂糖なれば、バターに茶と塩を混め飲し、麦酒を造り衣服も筒袖の皮服を着し出るに馬に騎し馬具も西洋馬具に酷似し天幕(テント)を張りて野營し水草を追て牧

畜を業とし其他帽子と云ひ手袋と云ひ皮製の長履に至るまで、日本か近來の新輸入新流行にあらずして彼等元來の風俗なり。一は氣候、地理、産物等の西洋に相同しきにもせよ自称文明の西洋と此未開の西番土人どか農も衣食住風俗に至るまで相同しきを見れば西洋文明の祖先たるか親類たるかの縁遠きものにあらざるを知る。文字は印度の古文にとり言語は西伯利的語にして蒙古、滿州朝鮮、日本等に近かり、支那語とは大に其系を異にす。若し西藏國を其人種、言語、宗教の同じきものを以て一國と仮定せんか、西藏四大本部よりも更に大なるの領土を得べし。即ち青海全部。甘肅の3分1、四川の5分2、雲南の3分の1は及印度雪山各地は皆確に人種言語宗教を一にし支那の本部18省と大差なくの大国は此亜細亞中原に強を稱するに足る大西藏國と成るべきも惜しむべし今は古のスロンザンガンポー大帝の勇なければ清に削られ蒙古に襲いし英に併せられ漸く頭蔵、喀木、前蔵、后蔵阿里的四部を存するのみ。

(3) 日本と此地方

日本人か大陸思想なく孤島根生の仕方なきと又年々50萬の増殖する人口を以て他に移民を求むるの時節此青海及新疆新開の地に入り込み大に大陸の風光に生活し又日本の文明を此内地に移殖するに國にはそろからん如きは米を生し蘭州、西寧地方に転出し麦余りありて西安又は蘭州に一斤7~80文なるに其地方は17文の價なり。米なきの地にあらず。麦余りあり西洋に行くと思へは大差なからん。前記の甘肅辺境記事を見玉はは其間違なきを見つつ解せらるるならんと信す。

(4) 青海の光景

周圍700清里(但12日里又云四十八日里)、流れ込む河108川と3つとも実は17~18川にすぎず。海中の島を海心山と稱しラマ寺あり。夏は波浪の為に行く石張冬期氷結時往來、一日にして達す。一年中の食物を蓄へ悉く、海中魚産多し。土人之を釣りて甘□爾、西寧に送るもの幾萬匹。一尾2~3尺大にして4~50文なり。

土人酋長皆青海周圍に住し、29旗あり。青海大臣之れを統へ一年一回酋長の進貢に冬科爾に於て位ひ予は丁度其節にありて実見す。大臣、副將 300余名状況たり。

屋根にも2~3本の木を並へて上に藪枝などを置き泥土を以て塗り込み平たき屋根となす故に屋上は乾草などの場所となり上下自由なり。室内土坎を造り板少ければ多くは土間に甘肅製の□子(テット)を敷けり。陝西に比して穴居人少けれとも又所々に見る。甘肅の旅店は客多くは牲口に騎るか馬車を率ふるかなれば構内廣く能く數十代の馬車を曳き込んで宿さる。食物は自分に粉を所持して自製自炊の風なり。又蒲團なければ自ら所持するを要す。土城、驛、或は鎮等人家5~60以上もあれば必ず堡と稱する。土城を築き二門、或は一門を設け匪徒の却掠を妨ぐに備ふ。衣服、一般に異らずと雖とも寒冷の地なれば皮著、毛織、毛服等を着る地あり。醫師、予道中に在て風邪し発熱□しかりしゆへ漢法醫を招き診断を乞ひ容體書の通り服藥せしに忽ち全治せり。

(未完成)

- ⑨ 1、この論文は、昨年11月に浄蓮寺本堂書庫より新発見された資料の中にあったもので能海寛師が旅行中に下書きしたものです。
- 2、この甘肅論は、能海寛師が明治33年甘肅省を通過して重慶に至るまでに記述した内容を平かな変換、アラビア数字変換、句読点を挿入して読みやすくして原文のまま掲載した。
- 3、論文の中には、当時の世界情勢等に基づく国名及び用語などの使用箇所があり現在とは大きく異なりますが、事情をご賢察の上、今後の研究活動に役立てて下さい。



中国・西安から蘭州までの能海寛の「旅行行程メモ」